

流星物質 2



Meteoroid
★ Idol He@rtbeat!

アイドル★
ハートビート!

流星物質2 アイドルハートビート！サンプル目次

- ・ 純真ハートビート！
- ・ アイマイ
- ・ トリップルアイドル≠ノットイコール
- ・ IDOLive!
- ・ B.O.X.2
- ・ ライトノベル作家はアイドル！
- ・ ぴゅあぶりーど

何時何分何秒地球が何回まわったとき？

- ・ わたしたちがアイドル！
- ・ 音の中の放課後
- ・ スロウバラード

☆気になる続きは本誌で確認してください！

僕は幽霊になって女の子に取り憑いているらしい。

記憶が確かなら体育の授業で、跳び箱から転落して：
：そこからが思い出せない。床に後頭部でも打ち付けて、
今頃病院で意識不明の重体って感じかと思われる。

「えなー、先に行くから戸締りお願いねー」
「はぁーい。いつてらっしゃい」

えなー僕のクラスの女の子の名前。

僕は鈴鹿川すずかがわえなに取り憑いていた。

同じクラスなのに全然接点も縁もない僕だけど、鈴鹿川
川のは少しだけ知っている。

彼女は、アイドルだ。

テレビで鈴鹿川が歌ったり踊ったりしているのを見た
ことはあるし、友達が見せてくれたグラビア雑誌に掲載
されていたちよつと過激な水着写真も見たことがある。

まだ新人ながらファンはかなり多いらしい。確かに鈴
鹿川はクラスでも一人浮きするぐらい可愛い。アイドル
として活躍できるのも頷ける。

その鈴鹿川に、僕が取り憑いていると知ったらファン
は発狂でもしそうだな、と感慨もなく思った。

「ごちそうさまー」

丁寧に手を合わせ間の抜けた声で合唱、食器をシンク
まで運び皿洗いを始めた。水の冷たさがまるで僕の感じ
た感覚みたいに伝わってくる。

さて：：この状況、どう伝えたものか。

どうやら鈴鹿川は僕が憑依？ していることに気付い
ていない。僕は取り憑いているくせに、憑り代の身体を
乗っ取るみたいに動かすことはできない。なすがまま、
といった体だ。

たった二十分でわかったことは。鈴鹿川に取り憑いて
いること。僕は何一つ行動できないこと。そして鈴鹿川
と五感から痛覚に至るまで、全ての感覚を共有している
ということだ。

彼女の感じる眠気も、食べたトーストの味も食感も、
見るもの全てまで。僕は鈴鹿川視点で、全く同じ感覚を
受けているのだ。

皿洗いが終わると、鈴鹿川は洗面所に向かった。洗面
台の鏡に映るのは紛れもなく彼女だ。僕の面影なんかど
こにもない。：：と思ったら、彼女の右肩あたりに亡霊
めいた面貌の僕の顔が映っていた。下手な心霊写真みた
いに解像度は悪いが、あのいかつい体育系な顔付き、紛
れもなく僕、雲出三峰くもすみつみねだ。

だが鈴鹿川は気付かないらしく、歯ブラシに歯磨き粉
をつけて歯磨きを始めた。どうやら朝に弱いようで、ま

だ眠気は感じるし目もぼつちり開いていない。

僕とは違って、歯を一つずつ丁寧に磨いていく。十分近くかけて磨いた後、口を濯いで洗顔。何かよくわからない泡で洗われる。

顔を洗って目が冴えれば気付くかと思ったが、結局鈴鹿川は鏡を見たにも関わらず、不気味な僕の存在に気付くことはなかった。視界を共有している僕に見えているんだから、鈴鹿川も視認できているはずなのだ。

眠くて覚束ない足取りで階段を上がり、自室へ。僕はこの部屋で彼女と同時に目覚め、自分が幽霊になって鈴鹿川に憑依したことを自覚した。

朝食のときに見ていたニュースによると、日付は事故の翌日で平日。学校がある。

鈴鹿川は鞆に教科書を詰め、支度を始めた。……がそれもすぐに終わる。おもむろに化粧台の隣にある大きな姿見の前に立ったかと思うと、唐突にパジャマを脱ぎ始めた。

鈴鹿川が着替える！ とっさに目を閉じようとした、だができない。あくまで身体を動かしているのは鈴鹿川で、僕は何もできないんだった！

姿見に映る、鈴鹿川の肢体……！

重力に逆らうように起伏した、立体感のあるふっくらとした胸、痩せっぽい肉付きのくびれた腰が堂々と曝け

出されている。

更に鈴鹿川はパジャマのボトムも脱いでしまう。鏡の前にはピンク色の下着一枚、ほぼ全裸の鈴鹿川の全身が露わになってしまっている！ 腰を捻り、鏡經由で自身の背中やお尻を観察している。染み一つない、白く健康的な肌に、引き締まっていてそれでいて柔らかそうな、絶妙な曲線を描くお尻……。

きつとクラスメイトの誰にも見せたことのない、鈴鹿川のハダカ……。彼女のファンが見たくても見れない、衣装の下の裸体を独り占めしているのだ。どんなグラビア写真でも拝めない、ヒミツの姿がファンでも何でもない、ただの同級生が独占視聴している。

そして僕は知ることになる。この憑依行為がただ僕の自由が効かないだけの現象ではないと。

これは鈴鹿川えなのプライベートを完膚なきまでに覗き見る、人として最悪の状態なのだ。

ブラを付け、夏服のブラウスを着て、スカートを履き、ソックスを履いてリボンを付けるまで——僕の意志に関係なく繰り返されるアイドルのお着替え。

塞ぐにも塞げない視界に広がる甘美な着替えシーンに僕はただ、放心してしまつた……。

アイドル声優の隠されたプライベートが、ファンでも友達でも、ましてや親友でもない男に暴かれるのだから。

アイマイ

柊晴空

プロローグ

「アンタ、私のこと好きだったわよね？」

「……は？」

「つまり私の魅力を知っているということよね？」

「いやいやいや、待って待って」

「ということはよ？」

「いやだから」

「アンタなら私の魅力を引き出せるってことよね！」

「その理屈はおかしい」

「よろしく！ プロデューサー！」

「お願い、俺の話聞いて？」

これが数年ぶりの彼女との会話だった。

「おい、葵、見たか？ 今日から始まる桜花祭のチラシ」
ある朝のホームルーム前、自分の席についた矢先、前の席の友人が話しかけて来た。

「ああ、もうそんな時期だっけ？」

年に一度、秋に行われるうちの学園独特の行事『桜花祭』

生徒たちはアイドル、プロデューサー、ファンの三組に分かれ、三日間という短いアピールタイムに一番多くファンを獲得出来たアイドルが学園のトップアイドルとして一年間君臨。トップアイドルになると学食などが無料で使い放題、学園の顔としてイベント毎をこなすことになる。

進学にも有利とかで、毎年様々な生徒がアイドルに立候補する。

そんなアイドルと組んで裏で活動するのがプロデューサーだ。アイドルから頼まれてプロデューサーをする生徒が大半。ちなみに担当したアイドルがトップになるアイドルと同じで学食使い放題、内心大幅アップ。大学への推薦などなど、アイドルと同じ報酬がもらえるそう
な。

その両方に属さない生徒がファンと呼ばれる層。基本的にアイドルたちを見て楽しむ普通の生徒たち。

『桜花祭』の最終日に投票をするのもこの生徒たちだ。

だいたいアイドルかプロデューサーとして参加するのは学園にも慣れ、まだ受験も先のことである我々二年生だ。

今年是谁が出るんだろうな、このクラスからもそれなりに出るとは思うんだけど。

「今年は葵も出るんだろ？ プロデューサーで」

「へえー、俺がねえー……」

「………」

「………」

俺たちは揃って首をかしげる。

「え？ 誰が出るって？」

「あ？ お前だろ？」

「俺が？」

「お前が」

「誰と？」

「相良と。幼馴染なんだっけ？ お前ら」

「いやいやいや、たしかに幼馴染だけでも。俺全然知らないんだけど」

「けどほれ。これ見てみ？」

そう言われて渡された新聞部お手製の桜花祭チラシ。

表には前回トップアイドルだった現二年生で隣のクラス

の滝という巨乳女子。

裏面には今年の参加生徒とプロデューサーの名前がズ

ラリ。

「男もアイドルでちらほら出てるな」

なんてどうでもいい事を呟きつつ、自分の名前と相良梨々という名前を見つけてしまった。

「うお！ なんて俺が！」

「いや、オレに聞かれても困る」

「相良ああああ！」

思わず相良の名前を叫んで教室を見回すが、姿が見えない。

「あれ？ アイツまだ……」

ちようどその時だった。

ガラッ！ と勢いよく開け放たれる扉。

特徴的なサイドテールを揺らした彼女は嬉々とした表情で俺を指差し声をあげた。

「見つけたっ！ 来なさい！ 葵！」

「ちよっ！ おい、相良！ 俺も聞きたいことが」

「いいから！ ちよっと来て！」

つかつかと寄ってきた彼女に腕を引っ張られ俺はどこ

へかと連れて行かれる。

「朝から元気なー、お前ら」

友人のそんなつぶやきを尻目に俺は教室から連れ出さ

れていった。

あのね、おしえてあげるね！

わたしね、しょうらいのゆめができたんだ！

にほんでいちばんのあいどるになって、きみのおよめさんになるってきめたの！

そうすれば、わたしのなりたかったものになれるし、きみとずっといっしょにいられるもんね？

だからね、きみにひとつおねがいたいことがあるんだ。きいてくれるかな？

わたしがね、とっぷあいどるになれるようにね、ぷろでゅーすしてほしいの！

きみがね、わたしのことをぷろでゅーすすれば、いつでもふたりいっしょにいられるもんね？

そうすれば、きみとわたしは、ずっとずっとそばにいらることができるとだよ？

わたしはね、ぜったいに、はなれたりなんかしないし、きみのことをうらぎったりもしないってちかうからね？

だからね、おねがい！
これからも、わたしといっしょにいてくださいっ！

カノンより

『わたしを、やとってくださいっ！』

ネットアイドル専門の弱小事務所のドアをノックもせずに開いた不届き者は、とても小さな女の子だった。

目の前に佇む少女は、短く切り揃えられた黒髪に、純真無垢な大きな瞳と、真っ赤なランドセルの端から少しばかり顔を覗かせるリコーダーの姿が印象的で、年相応の幼さを存分に引き出しているように思えた。

『名前は、カノンっていいます！』

元気の良さを大きな声で表現し、誰にでも好かれるであろう快活さを笑顔で作り出す少女は、自らをカノンと名乗り、何の前触れもなく手を差し出してきた。仲の良い友達や、クラスメイトにするように、握手を求めているのだろう。だが、久しく女性とは握手など交わしていない私からしてみれば、カノンの華奢な手に視線を向けるだけのことで、心なしか脈が速まり、他愛もない行動に目を瞬か^{しばた}せてしまう。そんな私の仕草が可笑しかったのか、半ば強引に、カノンは私の手を握ってくれた。

『お金はいりません、ここでアイドルになりたいんです』

その言葉の意味に、すぐに私は現実を直視する。

この子を、雇うことは可能だろうか、と。

本来であれば、身元を証明するものを何一つ持っていない少女と契約を結ぶことは断じて有り得ない。しかしながら今の私は悠長に事を構えるほどに懐が潤っているわけではなかった。既に火の車へと陥った事務所を立て直すには、一人でも多くのアイドルが必要だったのだ。

『しやちよーさんのところでアイドルになれるなら、どんなことだってがんばります。だから、お願いしますっ』
意図的ではないにしろ、私の手を握り、上目遣いをお願いをされてしまえば、首を横に振ることなど出来るはずもあるまい。更によえば、それ以前の問題も山積みとなっているのだ。そんな中で、カノンから目を逸らすことは、今の私には不可能と言っても過言ではないだろう。現状、所属アイドルが一人も存在していないことを理解しているのであれば、この子との出会いは必然であると言えるのかもしれない。それ故、私は僅か十歳の少女を事務所を迎え入れることを決めざるを得なかった。

『早くいちにんまえのアイドルになって、しやちよーさんを安心させてあげますから、きたいしててくださいっ』
嬉しそうに顔を綻ばせるカノンを見やり、私には同じように頬を緩める以外の道はなかった。この決断に間違いがあるとするれば、それは全てであると言えるだろう。けれども、今の私には間違いを指摘してくれる者は存在しない。そばにいるのは、カノンが一人のみだ。

だがしかし、それが思わぬ結果を生み出すことになろうとは、恐らくは誰も予測することはできなかったに違いない。私は勿論のこと、カノンでさえもだ。

『しやちよーさん、オーディションを受ける余裕なんてないですよ？ わたしは、今までどおりの売りだしからかまいませんから、まずはちゅうもくされるところから始めましょうっ』

カノンは、言った。

両手を横に曲げて、天秤の形を生み出したかと思えば、オーディションを受ける手間暇と、事務所へと転がり込んでくるであろう様々な姿形を成した対価が如何程になるのかについて、あどけない表情を作り込んだまま、私に助言をしてくれた。呆気なくも思える単純な言葉ではあるが、それは小学生とは思えないほどの戦略を秘めたものと言えるだろう。当初、私はカノンをネットアイドルとしてではなく、子役タレントにさせるべく、幾つかのオーディションに目を付けていた。けれども、カノンはそれを自ら断つたのだ。

『今一番ひつようなことは、ここを守ることなんじゃないんですか？ たしかに、わたしはなんでもするって言いました。でも、ここが無くなっちゃたらなんの意味もないんです！ だから、今は目先のりえきだけでもかまいませんっ、一緒にがんばっていきましょっ』

都内のとあるマンション。

オートロックはもちろん、行ける階が制限されたエレベーター、屋内外の監視カメラの設置、特定した個人を顔判別できるシステムなど、最新鋭のセキュリティが敷かれている。

そのマンションの一室には、片倉美音の姿があつた。

彼女は広いリビングで真っ暗なまま、電気を点けずにテレビを観賞している。

ソファに腰を下ろしている美音は、少しはだけてキヤミソールと布で作られたホットパンツを穿いている。

秋に入って少し経つ今としては、薄い服装なのかもしれない。

そんな美音は、ヘッドホンをしてテレビを見ていた。

アイドルが主演だというドラマの最終回を。

美音は撮影の為、スタジオに来ていた。

ドラマの最終回を撮るこの日、スタジオはなんとも言えない緊張感と達成感が漂っているようだった。

『本番はじめます』

誰かの声で全員が気を引きしめるとスタンバイが完了

する。

『アクション』

ラストシーンの撮影が、始まった。

“卒業式を終えた少女は、夕方になるまで校舎に残っていた。

橙に染まる教室で一人黄昏ている彼女は、空いている窓から外を眺めている。

色々あつた三年の短い学園生活という期間の中で過ごしていた長くて、幸せで、それでいて楽しい時間を思い返すその姿は、一枚の写真か絵画のようだった。

静かな時間が流れる全校生徒のいない校舎、卒業という別れの寂しさような空間に、突如何者が闖入した。

少し荒く開かれた扉は、余つた勢いで付柱に音を立ててぶつかる。

少女は顔の向きを変えずに口を開いた。

『生徒会長さんですね。卒業式は終わりましたのに、こんな時間に校舎に残つてどうされたんですか？』

生徒会長と呼ばれた男は、窓側最後方の席にいる少女の元に早足で行くと、少し息を整えてから言った。

『それはお互い様ですね。あなたもこんな時間までここで何してたんですか？ 加えて言うなら、半年前に会長職を譲つた自分を生徒会長と呼ばないでください』

ようやく見つけました。

そう一言付け足すと、彼は咳払いをして会話を改めた。

『東京に行くって本当ですか？』

『ええ』

少女は幼馴染の質問に答えている間も、夕焼けを眺めたままの姿勢を変えない。

幼馴染は続けた。

『そうか。あなたの事だからその意志は変わらないんでしょうね』

『ええ』

ようやく彼の正面を向いて、目を合わせた少女が言う。

『私は東京に行つて夢を追いかけます。それが終わるまでここには戻らないつもりです』

彼は彼女の一言に悔しそうに唇をへの字に曲げて、ほんの少し俯いた。

一度深呼吸を挟むと、正面にいる少女の目を見る。

『どうしても、自分と暮らしてくれませんか？ 自分は、本気であなたと結婚するつもりでいます』

決意を持った目で彼女を見つめ——誠意を持って告白をした彼からは、本気だけがひしひしと伝わる。

少女が返事をするまでの長い数秒、幾千の時が経っている様に感じる。

『どうしても私は夢に生きたいのです。だから、お断り致します』

拒否を示した少女。

彼はこみ上げてくる涙を堪え、笑みを作つて再び俯いた。

『私はここで失礼致します。そろそろ行かないと新幹線に乗り遅れますので』

緩やかに立ち上がると、踵を返した。

窓から吹き込む優しい風は、彼女の髪をなびかせる。

ヒールでかかとを鳴らしながら扉の前まで歩く。

彼女は髪を抑えて耳に掛けると、振り返る。

『私は、あなたの事が好きです。よろしければ結婚を前提に付き合つて頂けませんか？』

ほんの一瞬、息継ぎを混ぜてから続けた。

『私は今からお仕事に出ます。しばらく会えないでしょう。ですが、帰ったら籍を入れて頂けませんか？』

少女は恥ずかしそうに頬を染めて、幼馴染に微笑んだ。彼は彼女へ歩み寄りながら、我慢していた感情を開放する。

『はい、自分はいくらでも帰りを待ってますから。何年経とうとも、腰が曲がろうとも、あなたを待ってますから』

幼馴染がそう言うと、少女はそっと目を瞑る。

彼は、少し背の低い彼女を抱き寄せた。

二人は、唇を重ねた——”

今日はおれの初恋の女の子の十六歳の誕生日だった。その子は小学校三年生のときに転校してしまつたキリ会つてないし、連絡もとつてない。

当時のことはあまり覚えていないが、その子とは毎日遊んでいたような気がする。その子はきつと、もうおれのことなんて覚えちゃいないだろうけど、おれは最近になつて彼女のことを毎日のようにテレビで観ていた。

その女の子の名前は、木乃宮サクラ。

——世間一般的には、美波^{みなみ}ヒカルという名で知られているアイドルだ。

バイト帰り、夜道を鼻歌交じりで自転車でこいでいるとおれの行く手に何者かが立ちふさがつた。

当然おれは避けようとして、ハンドルを切るが、その人物は『ここから先は通しませんよ』と言わんばかりに両腕を道いっぱいに広げて通せんぼしてきた。

たまらずおれはブレーキ。

人通りの少ない夜道を、自転車で駆け抜ける浮いたよ

うな気持ちがいっぺんに吹き飛んだ。

「……なんだ？」

通せんぼしているのは、グレーのフードをかぶつた少年だった。

ウインドブレーカーに短パン姿。身長は一四〇センチくらいだろう。

フードで隠れているため表情は何えない。夜遊びをしている悪ガキっぽい雰囲気だ。

「なあ、アンタ」

生意気そうな声で少年が言う。

「ちよつと待てよ。今から時間あるよな？ オレとあそばねえ？」

そう言った。

「はあ？ 何をいきなり……」

変なヤツだ、とおれは警戒した。

ナンパ……ではないだろう。男どうしだし。見ず知らずの他人に対していきなり遊ぼうとは大した度胸だ。

「な、いいだろ？ 遊ぼうぜ」

「というかだな。まずフードを取ったらどうだ？ 顔を見せてくれない人間は信用できないんでね」

「えっ？ ああ——うん、まあ……いいか」

少年が一人で勝手に納得したふうに言つて、パサリとフードを落とすと現れたのは美麗な少年の素顔だった。

思わずおれはツバを飲んだ。

中学生くらいだろうか。その割には表情がかなり大人びている。

目つきは鋭いが切れ長の目で、鼻筋もよく通っている。小顔で、首が細く、体つきもかなり華奢だ。物語から抜け出してきた王子様のような感じだ。中性的な美少年と言っている雰囲気だった。

でも一つだけ気になったのは——
その美少年の髪型が、スキンヘッド——坊主だったことだ。

異様、と言えば異様だ。

坊主狩りだなんて年頃の男は嫌がるものだろうに。坊主狩りするのはふつう野球部くらいのものだ。

しかし、少年のどこか中性的な雰囲気も相まって、スキンヘッドは妙に似合っていた。独特の色気がある。それにどこかアウトローという感じもする。完全に外気にさらされている耳の形が妙になまめかしい。

「なに？ そんなオレのことジッと見てさ？」

「い、いや何でもない……」

悪ガキに見惚れてたなんて言えるか。

「!？」

ふと一瞬、脳内にフラッシュバックした映像と悪ガキの姿がダブる。

似たような人物に、おれは昔会ったことがある……：：：よ
うな。

——公園内に赤色のランドセルと黒色のランドセルが
並べてほかってある。

これは小学生時代……？

おれは記憶の糸を必死にたぐりよせようとする。

考えながらほとんど無意識に伸ばした手が、手探りで悪ガキの頭をぺたぺたと撫でて——

「わ。わ。な、なにすんだよ！ バカ！」

「くっす!!」

脛を振り子のキックで蹴られて思わずその場で悶絶するおれ。

もう少しでなにか思いだせそうだったのに、今ので全部吹き飛んだ。

あーもう無理だ。絶対思いだせないぞこれ……。完全にその気が霧散しちまった。

「——で、オレはアンタの言うこと聞いて顔みせてやっ
たわけだけど、遊んでくれるわけ？」

「お、おう……」

顔なんて見るんじゃないかと思った、と思う。

その堂々とした目で強気に命令されると何故か逆らえずおれはその言葉にうなずいてしまったのだった。

ライトノベル作家はアイドル！

藍上ゆう

——この物語はフィクションである。

オタクの聖地・秋葉原。

電気街口を出て、電光掲示板が並ぶその場所に一人の少女がいた。大学三年生となり、キャンパスが都内へと移ったため、最近この辺りで一人暮らしを始めるようになったのだ。もともとオタク気質があるため秋葉原という場所は前から行ってみたいところの一つであった。

とらのあなに、メロンブックス、アニメイトに、書泉ブックセンター。有名書店を回って満足したところで、彼女はそろそろ帰ろうと駅に足を運んでいた。

その時。

「すみません。ちょっといいですか？」

無地のシャツにチノパンという格好の二十代半ばくらいの男性が話しかけてきた。

彼女は反射的に振り返ってしまった。

「……何ですか？」

「あ、僕はこういうものなんです」

男は内ポケットの中から名刺を取り出した。そこには

『ライトノベル編集者』という肩書きが。メイド喫茶の勧誘ならまだわかるのに、どうしてラノベ編集者が自分に声をかけてくるのか、彼女は内心で首を傾げた。

「いきなり声をかけてびっくりしてますよね。でもこの肩書きは本当のものです。何なら会社に電話をかけて確認してもいいですか？」

「本物だとして……どうしてライトノベルの編集さんに私に？ もしかして何かのアンケートですか？」

「そうですね。そういったこともあります。ちなみにライトノベルは読みますか？」

「大学生なので学校に行く途中の電車の中で。あまり熱心な読者とは言えないと思いますけど」

うんうん、と何度か頷いた彼はさらに言葉を続けた。

「実はですね、僕たちのレーベルで新しい企画が上がっています、その企画のためにご協力願いたいです」

「新しい企画ですか……？」

「はい。もちろん協力していただければお礼もしますよ。少しお話を聞いていただけませんか？」

彼は近くにあった喫茶店を指さした。

彼女は考える。別にいかかわしい店に連れていかれるわけではないし、男の清潔な装いから悪い人には見えなかった。それに新しい企画というものにも興味がある。

ライトノベルは熱心でないとは言え、ほぼ毎日目を通す

くらいには好きなものだ。
話を聞くくらいならいいかもしれない、と彼女は首を縦に振って男について行くことにした。

○

コーヒーが来るまでの間、彼は自レーベルの業績について説明した。どうやらアニメ化作品がヒットしたらしく、これからどんどんレーベルを大きくしていきたいらしい。景気のいい話だな、と彼女は相槌を打ちながら聞いていた。

「まず、お聞きしたいんですけど」

店員がやって来て、テーブルの上にカップを並び終えたところで、彼は指を組んで真剣な面持ちになった。

「あなたが思うことで結構ですので、ライトノベル作家に必要なことって何だか教えてもらっていいですか？」

素人である自分にどうしてそんな質問をするのか検討もつかなかった。だが、しつかり答えないとアンケートにならないと思い、彼女は懸命に答えをひねり出した。

「えっと……読者を楽しませることでですか」

「その理由は？」

「やっぱり本を読むのってすごく大変なことだと思っんですよ。これだけ娯楽が溢れた時代ですから積極的にラ

イトノベルを選ぶ理由というものはないと感じています。それでも読んでくれる読者のために最高のエンターテイメントを提供するっていうことが大事になるのではないかと」

「素晴らしい。君は素晴らしい才能を持っているね」

唐突に褒められて、彼女はぼかんと口を開けた。

男はどこか無邪気な笑みを浮かべながら言葉を続ける。

「もしかして君はライトノベルを書いている？ もしくは書いたことがあるのかな？」

「ないです。私に文章を書くなんてできないですよ」

「いやいや。大事なのは、君の言うとおり読者を楽しませることなんだ。さっきの君の意見は実に的を射ている。

だから執筆経験があるんじゃないかなって睨んだんだ。

でもどうやら違ったようだね。だけど気持ちは同じさ。

僕たちもどうしたら多くの人にライトノベルの素晴らしさを伝えられるかって悩んでいるんだ。若者の読書離れなんて言われているのご時世に、綺麗なイラストがついているだけのウリではインパクトが足りないと感じていたんだよね」

「そういう意味ではいろいろな工夫がされてますよね。文字を大きくしたりとかマンガっぽい演出をしたりなど」

「そうだね。だけど、もっと大きなインパクトが必要だと思っんだ」

びゅあぶりーど

何時何分何秒地球が何回まわったとき？

珠洲鈴涼理

「ぶろりゅーさー、アイドルは年を取らないってみんな言うんだけど、何で？」

茨、誰に言われたんだい？

「ファンのおにいちゃんたちにね、言われたの。茨たんはいつまでもそのままできてね、って。いばら、このまま十一歳のままの方がいいの？」

ううん、ちゃんと成長するよ大丈夫だよ。

「そうなんだ、よかった。ぶろりゅーさーはこのままのいばらと、おつきくなつたいばら、どっちが好き？」

今のままのいばらが、一番かわいいよ。それにしたってどうしてそんなことを聞くんだい？

「ええとね、いばらちっちゃいから、このまま背が伸びなかつたらもうお仕事できないのかなって」

そんなことないとは思うけど。

「宇都宮さん、すごいでしょ」最近お仕事多いね。

「ううん、お仕事じゃなくて、背もおつきいし。胸もおつきいし」

大人の男の人に同意求めちゃダメだよ？

「ぶろりゅーさーも宇都宮さんみたいにぼんきゅぼー

ん？ みたいなアイドルが好きなの？」

僕の知ってる久慈城茨は今のままで十分可愛いから、気にしなくていいよ。

「じゃあちっちゃいいばらの方が好きなの？」

いや、そういうわけじゃ……。

「じゃあいばらのこと、嫌いなんだ」

今のは嘘！ 小さい茨の方が好きだよ！

「そっか！ いばらもぶろりゅーさーのこと好きだよ！」
僕は茨の成長を楽しみにしているからね、ゆっくりリアアイドルとしても成長していこうね。

「うん！ これでぶろりゅーさーもロリコンだね」

えっとね、いばらのファンのことをね、ロリコンって言うんだって。どんな意味？」

良い子は聞いちやダメだよ。茨は良い子だよね？

「いい子だけ知りたいもん！ いぢわるなぶろりゅーさーなんて知らないっ。絶交だよぜっこー！」

絶交かあ……。じゃあ僕は他の女の子のプロデューサーになろうかな。今までありがとうね、ばいばい。

「やっぱ嘘なの！ 他の子のところにいつちややだ！」

なんてね。冗談だよ。茨を置いてなんていかないさ。

「なんだよかつたあ〜」

そういうところが、お子様なんだけどね。

「もう、ぶろりゅーさーの、いぢわる」

「ぶろりゅーさー、アイドルはトイレしないってほん
と？」

また昭和な話題を……。吹聴したのは誰だ。

「いばら、実はアイドルじゃないのかな？」

誰に言われたか知らないけど、それは嘘だよ。気にし
なくていいんだよ。

「ほんと？ いばらはアイドルしてていいの？」

うん。プロデューサー嘘つかない。

「そっかー。いばら、アイドル続けたくて、ずっとおト
イレ我慢してたの」

それはまた律儀だね……。辛いなら早く行っておいで。

———

「ぶろりゅーさー、アイドルは容赦しないってほんと？」

ホントに誰だよロクでもないこと吹きこむの!?

「トイレの帰りに言われたの。ところで容赦って何？
かわいいの？」

ええとね、許すとか、手加減すること。だから容赦し
ないってことは、許したり手加減しないことなんだ。

「いばらちゃんと真面目にお仕事してるのに、手抜きし
てるって思われたのかな？」

いや多分、そう意味じゃなさそうだけど。茨はいつも
頑張ってお仕事してるもんな。

「じゃあどういう意味？」

お子様に言うことじゃないんだが……。そうだな、何
か競争するときとか、相手がお友達でも真剣にやろう、
つてことかな。

「手をぬいたら失礼だもんね」

そうそう。お互いいい気持ちでやりたいよね。

「じゃあこれから『容赦しないからね！』って言うね」
敵を増やそうなのでやめてね。

「でもこれからもアイドルでいられるみたいでよかった」

茨はピユアだなあ。アイドル以前に女の子だからね。

「その言葉の法的根拠は？」

え？ 今なんて？ 法的根拠？ えええ？

「いばらがアイドルだって法的根拠はあるのかな？」

意味知らないのに使ってるでしょ。

「うん。証拠を求めるときに使うんだって」

だから誰だ茨に次々と……！

「ぶろりゅーさーがろりくんじゃない法的根拠は？」

や、やめてください……！

「ろりくんでも容赦しないよ」

どっちも意味知らないのに使わないで!!

わたしたちがアイドル！

安房理弘

「わたしがアイドルなの！」

少女の頭頂部にあるアホ毛が、ぴーん！と天をつく。ジブリのアニメのように、肩まであるふわふわの髪の毛がぶわあつと逆立った。

「いーえわたくしがアイドルですわ！」

長髪をクロワツサンのようにくるくると巻いて左右に分けている少女が椅子から立ち上がると同時に、ばんつと机を叩いた。その机は会議室のような縦長の机であり、その机には三人の少女たちが座っていた。

クロワツサンの正面に座っている少女が、おどおどしながら口を開く。

「ぼ、ボクがアイドルだよ……！」

「乃々、あんたは男でしょ！」アホ毛っ子が言う。

「そうですわ」クロワツサンもそれに続く。

「ボク女の子だよ！」

乃々と呼ばれた三つ編みの少女——知的だが意思は弱そうだ——はぶくつと頬を膨らます。

乃々は男子の学ランを着ていた。

「そもそもどうして乃々さんは男の服を着ているんですの？」クロワツサンが問う。

「ボクはこっちのほうがり落ち着くんだよ」

「そんなことはどうでもいいとして！」アホ毛っ子は、またかと思いつきながら話を切り上げようとす。

「どうでもよくはないよ、柚子^{ゆず}さん。ボクのお母さんはボクに男の子の服ばかり買ってきたから小学校の間ずっと男子の服を着てたんだ、それで——」

「大体まえに聞いた話ね」

柚子と呼ばれたアホ毛っ子は乃々の話を遮る。

「それに美貴^{みき}、あんた前にも乃々さんにその話聞いてたじゃない」

「そうでしたっけ？」クロワツサンの美貴は信じられないといった様子だ。

「あなたの記憶力はにわとり並か……」

「なんですって！」

「ま、待って。話が逸れるよ。誰がアイドルをやるか。

ボクたちはそれを話し合うはずだったんだから」

「む、乃々さんの言うとおりね……」

「あなたがそんな妙なかつこうをしているからいけないのですわ。そもそもあなたが女性である証拠をわたくしはまだ一度も確認してないのですよ？」

「ど、どうすればいいの？」

「待ってまた話がずれてる！」柚子が話の暴走を止める。

昼時の校内放送は、言うなれば環境音だ。聴く奴なんていない。よほど注目できる話題かが前提知識として提示されているか、あるいは爆発音でも流れない限り誰も気にとめるものではない。仮にその放送が面白かったとしても、

「アハッ、今のウケるー」

「えっ、ナニナニ、何の話？」

「聴いてなかった？何でもない、で、何の話だったっけ」

以上で話題は終わりである。それから十数秒間放送に傾聴していたとしても、すぐに再生される聞き飽きたポップスが流れてきて、注意は散漫となる。

事前情報で、例えば生徒会選挙の開票速報が予定されていて、全校生徒の半数が（この想定の多さにも驚きだが）放送を聞き入っていたとしても、その結果の発表直後に沸く歓談に花が咲き、会長の話題の間に流れる副会長の名など誰も聞きやしない。

例外的に爆発音、そうでないにせよ何かしらショッキングな音声 flowed としよう。そうすれば確かに多くの生徒は放送を聴こうと耳を傾ける。

だが、俺はその例外に例外を行く。

「この放送、毎度思うけど、声良いよなあ」

そう語るのは二つ上の三年生の木高先輩だ。

「何の話です？」

「聴いてなかったのか!? 我が校の誇るアイドル、相談役ジュンちゃんのコーナーだぞ!？」

昼時の、南棟と北棟を繋ぐ四階屋外渡り廊下、聴けば、いつもと変わらぬ放送が流れている。毎日毎日、週五日とはいえ平日は休まず営業。流す側も聴く側もよくやる。

『今日の質問、疑問に答える、論説部のコーナー』説明しよう、諸君！「がやってきたぞ！ それじゃジュンちゃん、よろしくう!？」

『うむっ！ ここからは私、ジュンが受け持つぞっ！早速今日の質問だっ、「どうして校門前の伊東商店には冬だけおでんが置かれているのですか？」 うむ！ 説明しよう！ 伊東商店は多くの中高によくある前店というやつだ、君たちのお父上や母上様に聴いてみたまえ、伊東商店は三十年前に開業、以来一貫してターゲットを高校生に絞っている！ 冬場の部活帰りの我が校の生徒を狙っての商魂布陣、その先鋒たるおでんなわけだ、なっ！ そろそろ私もおでんが恋しいぞ諸君！ 諸君らもおでんを買って伊東商店を助けたまえ、以上!』

実に良い声だと思ふ。良く通る割に透き通っていて、多分子守歌なんか得意だろうと思える。

「ご搭乗ありがとうございます。本機は間もなく、着陸態勢に入ります」

気だるそうなアナウンスが機内に響く。羽田発の飛行機に乗って一時間半、つい先ほどまで都心に居た僕は今、隣でうたた寝をする女の子と二人、北の果てに降り立とうとしている。彼女は友人でもなければ、もちろん恋人などでもない。さらに言えば、僕たちは今日出会ったばかりなのだ。

無防備に幸せそうな彼女に反して、僕は窓の外に映る景色を横目に、陰鬱な気分沈んでいた。僕は一体、何をやっているのだろうか。どう考えたって馬鹿げている。断れば良かったんだ。そもそも何故僕なのだろう。他の誰でも良いじゃないか。

そう思う反面、僕はどこかで安心してた。大学でもストリートでもない場所への逃避は、存外僕自身が望んでいたことなのかもしれないとさえ思えた。

それはまさに、晴天の霹靂だった。

大学のバンドサークルを辞めて以来、僕はストリートという名のアスファルトの海へ繰り出すようになった。昼

間は楽器店でぼんやりとギターを眺め、あるいは音楽バーに入り浸り、夜はギターを肩にさげて、寄る辺を求めてさまよった。適当な場所を見つけては、ギターと喉を掻き鳴らした。ストリートはどこまでも自由だった。今日だってそうだ、何も変わらない土曜のはずだった。違ったことと言えば、昼間からギターを取り出したことくらいだった。どうという理由は無かった。ただ今日は、昼間から歌いたい気分だったのだ。

チューニングをしながら人の波に目を向けると、一人の女の子が目留まった。同い年くらいだろうか、白い肌に白のワンピース、そして鎖骨の辺りまで下ろした黒髪が印象的だった。多くの人が行き交う中、彼女はラストソングと決めているスロウバラードが終わるまで、僕の歌を聴き続けていた。

ライブを終えるなり、その女の子が近づいてきた。曖昧に笑い、握手をしようと手を差し出す僕に向けて、彼女は可笑しくて堪らないといったようにこころと笑いながら言い放った。

「下手過ぎ、最後のバラードなんて最悪ね」

手を伸ばしたまま啞然とする僕に、彼女は続ける。

「私、これから流水を見に行くの。一緒に行かない？ 大丈夫、お金ならあるわ」